# 本田宗一郎顕彰会

Honda Soichiro Society

会　報
第２号
平成17年6月


## 本田宗一郎顕彰会　第二号の発刊に当たって

本田宗一郎顕彰会会長

浅野　保


天竜市産業観光まつりに本田宗一郎店を開店したところ、多くの方が立ち寄っていただき激励を受けた。その大半の方から、「本田宗一郎の記念館だかは、いつできるのかね。」と聞かれた。

それは、二年目の会費をいただいた、ことも合わせ当然の成り行きと考えている。

このように記念館（仮称）建設への期待・関心は浜松市との合併を控えて、内なる高まりがある。

こうした気運の中で、顕彰会としても市と一体となって、多くの方のご意見を聞いて会の充実と合わせ皆様の期待に応えてゆく必要があると痛感している。それには、先づなんといっても、どんな内容・機能をもった建物にするか、（建物は市がたてる）この事を考えないと建物の大きさ規模、場所なども明確に出てこない。

そこで、顕彰会としては、活動のひとつとして既に建設されているところ、これから建設されるところの状況を視察する必要があると考え、八月五日には、鈴鹿市にある本田技研のサーキットと、同市の若松地区にある大黒屋光太夫顕彰会を尋ね学んだ。

この顕彰会は、天竜市の本田宗一郎顕彰会より、ひと足早く発足し、地域を上げて記念館建設に取り組まれている。

非常に参考になった点は、天竜市と地域・環境が似ていて、人物を顕彰し青少年の教育に役だてる、という狙いのもとに進めている点である。ご丁寧なご案内説明をいただき感銘した次第である。

十月十五日には、有名な栃木県茂木町「ツイリングもてぎ」を視察研修をした。この施設は、本田技研工業㈱が投資した、広大な土地に鉄筋三階建ての大展示施設や見学者用のホテルも完備し、目を見はる大規模なものである。

展示施設、内容も本田技研の総べてが、わかるもので、四輪車、二輪車など一千台以上が展示され、まさに「世界の頂点を目指そう」のスローガンのもとに挑戦し続ける、もの作り本田技研の意気込みが、ひしひしと感じ取れ圧倒された。

大規模な敷地は、森と草原の一大公園（遊園地）その広さは、二俣町全体がスッポリ入る位広い、自然と共生する見事なサーキット場や木の葉や森の素材を使った工芸・工作教室なども完備されている。

これらの施設は平成十年三月本田技研創立五十周年を記念して開館したものである。

ただただ驚きと感銘の一言につきる施設内容である。

こうした施設を見学することによって、天竜市における本田宗一郎記念館（仮称）のあるべき姿、内容・機能などが、明確になったということで意義深い貴重な視察となった。

私は、天竜市における本田宗一郎の記念館は、日に日に躍進する本田技研の姿を表現するものでなく、人間本田宗一郎の赤裸々な人柄と業績を末長く後世に伝え、青少年の学ぶ施設・建物でありたいと考えている。

結びに当たり、それぞれの見学・視察場所で身にあまるご案内と持てなしを頂き感謝をもうし上げると共に、今後一層の努力をし皆様の期待に応えて参りたいので変わらぬご支援を念願する次第である。

本田宗一郎さんの故郷　天竜市　二俣川

# 本田宗一郎顕彰会 会報第二号の発刊にあたって

## 会報発行に寄せて

天竜市長
中谷良作

天竜市が計画する本田宗一郎記念館建設事業は、平成十六年度末に基本構想・基本計画策定業務の報告書がまとまります。記念館建設の基本コンセプト、建設規模が決定し、平成十七年度には建物の基本設計作業に入る予定です。もちろん、さち夫人にも記念館建設についてはご了解を得ていますが、建設事業の動向には強く関心を示され、途中経過を数回にわたってお伝えしております。

本田宗一郎さんが本田技研工業株式会社の社長時代、長年にわたり秘書を務められ、昭和五十八年の社長勇退後においても、本田家の執事としてお世話をされておりました原田一男さんという方がいます。長い間宗一郎さんのそばにいらっしゃった方で、本田さんの人となりを最も知っていらっしゃる方のお一人と言えます。

昨年初め、その原田さんを通して、さち夫人から「数百点に及ぶ宗一郎氏の遺品を天竜市に寄贈していただける」という話がありました。大変ありがたいお話で、本田宗一郎記念館建設計画に弾みがつくことになり、さち夫人に直接お会いして、喜んで受け入れる旨を丁重にお伝えいたしました。

さち夫人にお会いする前でありましたが、この遺品の整理作業を本田家から全面的に依頼されていた、原田さんにもお会いする機会がありました。

原田さんは「おやじさんの遺品は、あちらこちらから、いただきたい旨のお話があったが全てお断りした。是非生まれ故郷である天竜市に全てを持っていってもらいたい。おやじさんも、そうすることが一番良いと言っている気がする。このことは、さち夫人にも了解を得ている。」とおっしゃられ、私も「責任を持ってお預かりします」とお答えしました。現在この遺品は、一つひとつ確認し整理をさせていただいているところであります。

平成十七年七月には、新浜松市が誕生します。合併後の新市建設計画には、各市町村の「地域の個性の尊重」や「市民の憩いの場」としての独自事業が盛り込まれています。もちろん、本田宗一郎記念館建設事業もこの計画に登載され、継続して進めていくことが確認されています。

本田宗一郎顕彰会は、今後広く会員を募集し、多くの宗一郎ファンを集め、活動も活発になっていくことでありましょう。郷土の偉人「人間 本田宗一郎」の生きざまの精神と業績を恒久的に伝承するため、今後におきましても積極的な活動がなされるよう願っております。また会員の皆様をはじめとする多くの方々のご支援、ご協力をお願いし、ご挨拶と致します。

## 私とホンダの車

天竜市議会議長
米山徹

私のホンダの車との接点・想い出を中心に書かせていただきます。

平成十年の秋、当時アメリカのシカゴで司法研修をしていた二男を妻と一緒に訪れた時、シカゴ空港から乗ったタクシーが、ホンダの車（中古のオンボロ車）でした。シカゴの市街地へ向かう途中、車窓から眺めると何と中古のホンダ車が（タクシー・自家用車）街中を走り回っている、ここがアメリカ……と思ったほどでした。この時ほど、日本国民として、天竜市民としての誇りを感じたことはありません。

また、同僚の議員とニュージーランドをプライベートで旅した時、山間地の道なき山・川・谷をホンダの軽四輪のジープで駆け回って、小さな冒険をした経験も鮮明に想い出として残っております。この時もシカゴと同様の思いでありました。

本田さんの夢は世界中をホンダの車で制覇することにありました。男性は空想に生きる、それがたとえ誇大妄想であろうと、その夢を実現すべく猛進する。しかし、多くの男性は抱いた夢もユメとして終わり、未来をながめ様とした目も見通しのきかぬまま、中途半端な一生を終わるなかで、本田宗一郎さんは、空想を現実のものとし、抱いた夢も自分のものとして生涯を終えた。その努力と根性・情熱は、現在の生活に満足する者は、人生の脱落者であると教示しているように想えてなりません。本田さんは大偉人だ。

さて、私共天竜市の議員は、常任委員会の行政視察等々の機会に、親善大使の役目を担うつもりで、ホンダの創業者、本田宗一郎生誕の地であるとPRしておりますが、残念なことに一部を除いて、知られておりません。今後、顕彰会が情報発信やPRの要となる必要があるのではないか。

また、天竜市議会では、本田宗一郎記念館の建設について議論しております。質疑の中で当局の基本的な考えも明らかになってまいりました。候

補地は中心街のにぎわい再生のためにも、クローバー通り周辺の市有地を第一候補として考えている。施設規模としては、秋野不矩美術館と同規模以内とし、できるだけ早い時期に候補地を決定していきたいとしている。ユニークな建物、ユニークな展示を期待いたします。顕彰会の発展をお祈り申し上げます。

平成 16 年度　本田宗一郎顕彰会総会

## 本田宗一郎顕彰会　会報第二号の発刊にあたって

静岡県議会議員
中谷　多加二

本田顕彰会も発足して二年目を迎え、天竜市民の理解も深まり多くの会員の思いとして『本田記念館』建設があります。私の祖母は既に他界をしておりますが、本田宗一郎氏の一学年後輩で、生前よく本田さんのことを（なんか小僧・暴れん坊）だったと懐かしんでいました。

尋常小学校時代のことですが存在感のあったガキ大将のころの記憶はハッキリしていたものと思います。

いよいよ本年六月末日をもって浜松市に編入合併されますが、天竜市の名誉市民でもある本田宗一郎氏の業績は新浜松市民にとっても誇りであり、ゆかりの品物、人となりを知り得るもの、会社の発展の記録等々、これらを一つにまとめ、ゆかりの方々や、多くの県民、全国のバイクの愛好者・こういった方々に各種の情報を提供していく施設を建設することが重要であると思います。

プロジェクトXにも本人をはじめ、関係の方々も登場するなど新市になっても当然引き続き記念館建設の動きは加速されなければなりません。

固有名詞を冠にしている〔秋野不矩美術館〕、そして〔本田宗一郎記念館〕仮称ですが天竜市という名称がなくなる中で将来、この地を語るうえで欠かすことのできない両施設だと思います。

この地に生まれた天才経営者の人となりを後世に伝えることも私どものつとめであるという認識を共有して、今後の活動に皆様と共に取り組んでいきたいと思います。

## 本田宗一郎

Soichiro Honda

明治 39 年（1906 年）、静岡県磐田郡光明村（現天竜市）に生まれる。

昭和23年に設立した「本田技研工業」を「世界のホンダ」へと躍進させた。

## 本田宗一郎年譜

| | |
|---|---|
| 明治39年 | 11月17日、磐田郡光明村で鍛冶屋の長男として生まれる |
| 大正11年 | 二俣尋常高等小学校卒業、「東京のアート商会」へ入社 |
| 昭和3年 | 独立し、浜松市に「アート商会浜松支店」をつくる |
| 昭和6年 | 当時木製だった自動車ホイールを鉄製に変え特許をとる |
| 昭和9年 | アート商会浜松支店を閉店し、東海精機㈱を設立。ピストンリングの製造開始 |
| 昭和10年 | 浜松高等工業高校（現静岡大学工学部）の聴講生となる |
| 昭和11年 | 全日本自動車スピード大会に出場、自作車で120kmのスピード新記録を樹立したがレース中に事故 |
| 昭和12年 | ピストンリング製作に成功 |
| 昭和21年 | 本田技術研究所を開設、旧陸軍六号無線機用小型エンジンを改造し、自転車用補助エンジンを製作 |
| 昭和23年 | 本田技研工業㈱を設立。本格的オートバイの生産を開始 |
| 昭和27年 | 小型エンジンの発明その他で藍綬褒章を受章、カブ号Ｆ型完成 |
| 昭和34年 | イギリス、マン島T.Tレース初参加。６位入賞（125cc）ロス・アンゼルスにアメリカホンダ設立 |
| 昭和35年 | 本田技術研究所を分離独立し、㈱本田技術研究所とする。鈴鹿製作所操業開始 |
| 昭和36年 | イギリス、マン島T.Tレースで完全優勝（125cc、250cc） |
| 昭和38年 | スポーツカーS500発売 |
| 昭和40年 | F-1メキシコグランプリでホンダF-1優勝 |
| 昭和44年 | ロス・アンゼルス名誉市民に |
| 昭和47年 | アメリカ金属学会の名誉終身会員に |
| 昭和48年 | 天竜市名誉市民となる。本田技研工業㈱取締役社長を退任 |
| 昭和54年 | ベルギー王国より王冠勲章コマンドール章受章 |
| 昭和56年 | 勲一等瑞宝章を受章 |
| 昭和58年 | 本田技研工業㈱終身最高顧問に就任 |
| 平成元年 | 日本人として初めてアメリカ自動車の殿堂（A.H.F）入り |
| 平成3年 | ８月５日逝去、84歳。旭日大綬章を受章、正三位に叙せられる |

# 業務日誌

## 平成16年度　本田宗一郎顕彰会主な事業

● 16年3月18日～
本田家から寄贈された遺品約1000点余が、東京本田家より天竜市に（3月18日～4月5日まで）大型トラック5台により搬入された。
　遺品の中には、F1模型・愛用カメラ・収集した各国の食器など宗一郎氏の人柄や趣味を偲ばせるものが多数ありました。
　寄贈された遺品は、現在整理作業（リスト策定等）を進めております。

● 6月10日
本田宗一郎顕彰会理事会・監事会開催　市民ホール「壬生」
「平成16年度　総会開催」及び「仮称本田宗一郎記念館建設構想」について検討会を行う。

● 6月20日　平成16年度
本田宗一郎顕彰会第2回総会開催
記念講演会　講師　作家　岩崎　峰子氏
演題「本田宗一郎さんの好奇心」参加者　320名
講演の中で「日本舞踊」も取り入れたユニークな講演で本田さんは「何にでも興味を持ち創造力にあふれていた方」だった等述べられており、内容も大変好評でした。

● 8月5日
三重県鈴鹿市、大黒屋光太夫顕彰会との意見交換会（視察研修　理事・監事・市職　12名参加）
　鈴鹿市は平成18年を目標に「大黒屋光太夫記念館」の建設の準備を進めていた。
　記念館の資料・展示物は隣接している小学校の空き校舎を利用して展示保管されており、管理運営は「大黒屋光太夫顕彰会」が行っていた。
　また、資料収集に積極的に努めていた（対象が江戸時代であるので資料収集が困難）。
顕彰理由
　江戸時代　船頭大黒屋光太夫は、江戸に荷を運ぶ途中、暴風雨に遭い、アリューシャン列島に漂着。苦難の末、ロシアの「女帝エカテリーナ2世」に謁見し、許しを得て10年ぶりの帰国を果たした。その強靱な精神力を育んだ風土を顕彰している。（井上靖の小説「おろしや国酔夢譚」として出版されている。）

● 10月15日
栃木県茂木町「ツインリングもてぎ」視察研修
理事4名参加
名誉市民第1号である本田宗一郎さんの功績と不屈の精神を後世に伝え、今後の人づくり、ふるさとづくりに生かしていこう、との顕彰会設立主旨に添うべく、平成18年を目標に計画されている「仮称　本田宗一郎記念館」建設構想の資料収集のため「ツインリングもてぎ」を研修視察した。
　この施設は、本田技研工業㈱が現在までに生産した2輪・四輪のレース車及び市販車・汎用製品等展示・ロードコースが整備されており、特に体験コーナー（どんぐりの森等）については、検討を進めている記念館構想の参考となった。

● 10月28日
本田宗一郎顕彰会理事会（記念館建設構想検討会）
参加者　顕彰会理事・市担当者・コンサル等19名
協議事項　「仮称　本田宗一郎記念館」建設のコンセプト・施設の基本理念・施設規模・施設整備候補地及び作業スケジュール等について検討した。

● 平成16年11月～12月
市内には本田宗一郎氏本人を直接知っている人達が少なくなっており、早期に当該人の聞き取り調査を行い「人間・本田宗一郎」の記録を残す作業を進める。面接対象者5名とし（目標）引き続き市外の対象者にも協力を依頼する予定。

● 11月～12月
先に実施した顕彰会総会（2回）における講演記録集の編集を進める。
本田技研工業㈱　元副社長　西田　通弘氏
作家　岩崎　峰子氏

● 平成17年1月～3月
仮称　本田宗一郎記念館建設基本構想検討会
（3月末日を目標に取り纏める）

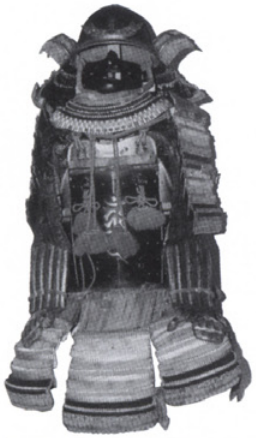
● 1月～3月
本田宗一郎顕彰会理事会（本年度中に3回開催予定）

● 1月27日
仮称【本田宗一郎記念館】建設構想検討会
（顕彰会理事・市・委託業者等18名参加）

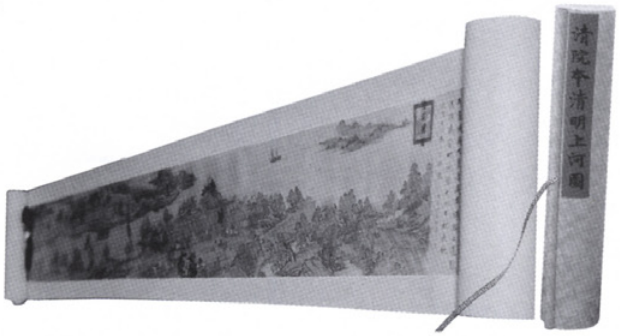
● 3月1日
仮称【本田宗一郎記念館】建設予定地としてクローバー通り商店街市有地を選定した旨、市長が議会に報告した。

● 3月25日
本田宗一郎顕彰会総会準備
（総会予定日時　平成17年6月18日（土）午後5時30分）

## 遺品（愛用品等）一部紹介



**■鎧兜（甲冑）**
金小札六枚胴具足（キンコザネロクマイドウグソク）
作者　明珍宗信
時代　江戸初期頃と推定




**■絵巻物**
張擇端筆【清明上河図】の写本（台北故宮博物館謹製）
宋代写実美術の最大傑作とされています。
作家　堺屋太一さんより、宗一郎さんに送られたものです。

**■製図板**
宗一郎さん愛用の製図板
この製図版により、数々のアイデアーが生まれました。

# 本田宗一郎さんに寄せる思い出の記

## ○本田さんはオートバイ産業を創出

労働安全コンサルタント
技術士　加藤　幸男

浜松地方においてのオートバイ産業は今や日本一の生産額を誇り、平成十五年では全国シェアーで六五%を占める産業にまで成長して不動の地歩を確保している。工業製品の構成比率でも十四・六%で第一位と首位を維持している。まさに、浜松地方産業の大黒柱である。

その原点は、戦後本田さんの開発した2サイクル50ccA型エンジンからである。

当初のエンジンのクランクシャフトは軍の放出物資で払下げられた砲弾の弾頭が材料で父親の工場（合資会社加藤鉄工所）が加工を受注、私が加工をしたものであった。

○本田さんとの出合い

私は鍛冶屋の長男として生まれ、その後は機械の技術屋として、今日も働いているが、本田さんを生涯の師として仰ぎ、終生忘れる事のできない希有の存在である。

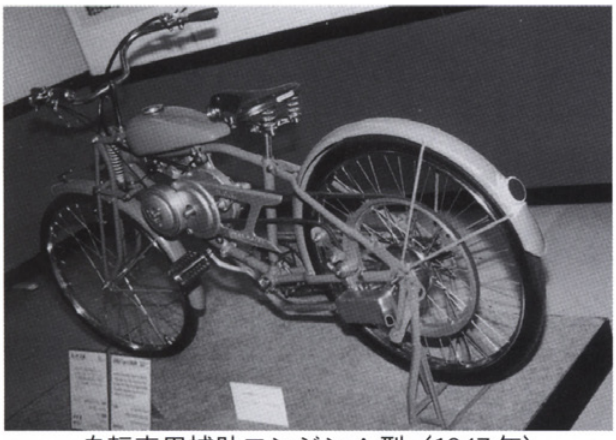
最初の出合いは、私が小学三年の頃（昭和七年頃）わさびの缶詰のプラントを駅前の木ノ下商店の主人から頼まれて加藤鉄工所へ弁当持ちで半年間通勤していた頃であった。

当時は、科学的研究が十分でなかったためわさびはガスが出て缶詰にはならなかったが、好奇心の塊の本田さんが大声で歌を口ずさみながら、仕事に熱中していたことはよく覚えている。

○矢立の壺の中にカニの毛が（足毛のこと）

初めて色紙の揮毫をお願いしたのは昭和四十六年十一月十日光明小学校創立記念日の時であった。矢立の壺に水を数滴落として直ちに、小野道風の故事にならって、柳の葉にカエルが飛びつく絵を描かれた。描き終わって本田さんが居合わせた皆に聞かれた。「この壺の中に何が入っているか」?誰も分からない。「この中には天竜川のカニの毛が入っているんだ。」

俺は描きたいときには直ぐ描きたいんだ。そのためには工夫が必要だ。墨は油煙とニカワを固めて作ってあるんだ。綿や海綿だと芯まで入り込んで固まるため溶けるには時間がかかるんだ。カニの毛は油分があるから中まで染み込まずに表面で固まっているから水を注げばすぐに墨が溶けて描ける様になるわけである。性能を試すため全国の名だたる川のカニを全部集めて調べた結果、身びいきではないが天竜川のカニの毛が最高であったので、この毛を使っているとのことであった。



自転車用補助エンジンA型（1947年）

本田語録の中に「試す人になれ」とある通り、考えているだけでは物事は始まらない。

兎角、「試して見よ」と、千金にも値いする教訓をこの色紙からも与えられたものであった。

## 遊びのなかから、志を立てる。

—笹竹幸次さんを取材して—
フリーライター　真鍋　澄夫

筆者は一九八八年に天竜市三十周年誌の編集に携わった。まだ鍬鑁としておられた本田宗一郎さんにお目にかかり、親しくお話を伺った。本田宗一郎フリークを自認する私にとっては、半生最大のハイライトの一つだ。本田さんが自ら書かれた著作はもとより、さまざまな文献を漁っては読んできた。そんなこともあってか、顕彰会事務局長の浅野建雄さんのご好意で、本田さんの知友の聞き取り取材をさせていただけることになった。

本田さんの知友のうちで、山崎卯一さんと笹竹幸次さんには格別の関心がある。後々まで本田さんが心を許した終生の友だちだったように思えたからだ。最初の取材が笹竹幸次さんだったのは、個人的にとても嬉しかった。

笹竹さんは明治三十九年九月五日生まれの九十八歳。少し耳が遠くなられたが、とてもお元気だった。記憶も確かで、質問したことには即座にお答えいただいた。なにしろ、家がすぐ隣。一般にはまだ知られていない本田さんの秘話が次々と飛び出してきた。

「〝あのやろうは生意気だ〟って喧嘩してみたり、おかしなことをやっては笑かしてみたりする。うんと悪さはある

笹竹幸次さん

が、悪気でやったわけじゃない。当たり前のつもりが悪気になったり、ふとしたことで仲良くなったりもする。もの言いは悪いし、悪さもした。偉くなったから本田さんの話をするのはなかなか語弊がある。言われんことばかりあるわけだ」と、前置きして、笹竹さんは当時のことを語ってくださった。

当時の山東小の一学年は四十人ほど。男の子たちの遊び場は、光明山の山裾の斜面にあった樫の木の疎林、通称「すべり山」や、〝四十八瀬川〟との別名があった二俣川とその両岸の竹林、そして時には船明にあった「弁天島」周辺の天竜川にも遠征したのだという。遊びは、すべて遊びの中から生まれ、工夫された。本田さんのこの面での才能は際立っていたと笹竹さんは言う。「悪いことはなかなか研究する。今の若い者は出来合いの道具でやっちゃうが、昔はみんな手作りだ。自分らで作るのが面白いだ。」こうした環境が子どもたちに無限の創造力を養う機会を提供していた。不便をはねのける意志が子どもたち自身の中で磨かれ、鍛えられていった。

本田さんの家も笹竹さんの家も、なかなか子だくさんだった。「学校から帰ると、背中に幼い弟や妹をくくりつけられる。木登りなんかはそれじゃ不自由だから、木の根元にくくり付けておく。夢中になって遊んでいるうちに、弟妹のことはすっかり忘れて家に帰る。それでこっぴどく怒られる、そんなことはしょっちゅうだった」。今の若い親が聞いたら卒倒しそうなほど乱暴で荒っぽい扱いを受けながらも、子供たちは逞しく育っていった。

こんなエピソードもある。「はじめは泳げんもんだから、どうかしてうまく泳げるようになりたい。誰かが〝メダカを呑むと泳ぎがうまくなる〟って言い出したものだから、われもわれもとメダカをすくって生きたまま飲み込んだ」。なんとも研究熱心で、好奇心旺盛だ。失敗を恐れずにとにかく試してみる。失敗が次への糧になることを彼らは知っていた。そんな日々が、本田さんや笹竹さんの自己陶冶の場となっていた。

本田さんに限らず数多くの先駆者、パイオニアが天竜の地から輩出している。教育的な環境がベストだったとは思われない当時の北遠から、なぜこうも多くの異能異才が陸続と輩出したのか。これは三十周年記念誌の取材報告にも書いたことだが、子どもの自由な発想を決して疎外、禁止することなく、乏しい財政のなかで民活的な発想で教育基盤を支えることに専心した地域ぐるみの〝本物の大人の智恵〟があったからだということを、今回の取材でも再確認することができた。「律し」ではなく、「立志」を大切にした天竜人の気概を、この取材で私は再び見たのだと思った。

## 「急成長企業の株主は結構辛い」

—坪井三吉さんを取材して—

坪井三吉さん

坪井三吉さんとその弟に当る坪井房吉さんが、待っていてくださった。本田さんの知友取材の二回目は、本田さんの弟であり、仕事の面でも片腕となった弁二郎さんの義弟坪井三吉さんだった。三吉さんのすぐ上の姉が、弁二郎さんに嫁いだことで、坪井家は本田家と親戚になった。弟の房吉さんも、終戦で海軍を除隊した後、山下町時代の本田技研に入社し、レース活動や耕運機の製品開発や品質管理などを歴任して、近年退職された。

坪井さんが、取材のために用意してくれていたのは、設立間もない本田技研工業（株）の株主名簿と配当通知表という貴重な史料だった。謄写版刷りの昭和二十九年二月の株主名簿の大株主編には、以下のような名前が並んでいた。

本田宗一郎　藤澤　武夫
日興証券
増田　儀一　本田弁二郎
三菱銀行
坪井　三吉　藤平　泰司　松井　照男
袴田　保

坪井さんは、なんと三菱銀行と並ぶ第六位の大株主だったわけである。本田技研設立の年、昭和二十三年に五百株の出資を引き受けている。それが六年後の二十九年には二万株を保有するまでになった。その間、本田技研は増資に次ぐ増資を繰り返していた。設立一年後に倍額に増資、二十七年には六倍増資を行っている。一方、配当は初年度が三千円、二年目が八千円、三年目が九万四千円、そして四年目には八十四万三千円になっていった。二十九年には税金を差し引いても、六十七万五千円が手元に残る計算だ。

「計算上はたしかにそうなる。だが、配当は株でくれる。増資があれば、さらにお金を持ち出しだ。一応は金を貰っていることになるわけだから、税金はもっていかれる。ダブルパンチだわな。二十八年には十六万八千円も税金でもっていかれた。天竜じゃ一番だった。本業で必死に稼いだ金が全部税務署にもっていかれ、さらに増資の金も工面しなけりゃならん。」

昭和二十八年の物価一覧表が手元にある。それによると、牛肉（中百g）四十二円、食パン（一斤）二十八円五十銭、とうふ十二円、清酒（一級一升）八百七十五円、そば（かけ・もり）十七円、大工手間賃（一日）五百三十円、巡査初任給六千九百円といった金額が並んでいる。その時代の十六万八千円円を税金として払うのは、並み大抵のことではない。

坪井さんは、これを本業の製畳業で稼ぎ出し

た。当時の国鉄静岡鉄道管理局の畳を一手に納めていたのである。房吉さんの除隊後しばらくは手伝った。「父親が早くに亡くなって、兄（三吉さん）が俺ら兄弟の面倒を見てくれた。みんなに家をもたせてくれたんです。まぁ、それだけ儲かったということなんですけど」と言って、最後は爆笑になった。

急成長企業ホンダを、こんな形で支えた市民もいる。これが天竜の懐の深さなんだと思った。

## 本田さんに学ぶ光明小学校の子どもたち

前校長　野中邦夫

光明小学校の学校教育目標は「試す人になろう」である。「試す人」とは「自ら課題をもち、進んで調べ解決する。失敗を恐れずに夢に向かって挑戦する」光明小の子どもの姿である。

この言葉は、本校の先輩である本田宗一郎氏から、昭和四十八年の光明小学校創立百周年を記念して子どもたちに贈られたものである。また、本校の「郷土本田資料室」には、新型エンジンの開発をしている氏の写真と一緒に「成功は反省と努力」と書かれた自筆の色紙を納めたパネルがある。

この二つのメッセージから、氏は「失敗を恐れずに勇気を出して試す人になって欲しい。」「失敗したら、失敗した原因をしっかりと確かめて反省し、成功に結びつけよう。」と子どもたちに呼びかけている。本田宗一郎氏の熱い想いと期待が伝わってくる言葉である。

本田さん自筆の色紙

「試す人」に向かって子どもたちは「郷土本田資料室」で本田宗一郎氏の幼少時から晩年までの足跡を調べたり、児童会の「本田さん集会」でも、氏の生き方やエピソードを劇やクイズを通して学んだりしている。会場の体育館いっぱいに感動が伝わる集会活動である。

また、子どもたちは、運動会や持久走大会等の学校行事、日々の学習や生活の中で「試す人」に向けて取り組んでいる。何と言っても子どもたちが楽しみにしているのは、自分の設定しためあてに向かって取り組む水曜日の「ゆめタイム」の時間である。僅か三十分間であるが、将来の画家を目指してスケッチに没頭する子。体を柔らかくしようと柔軟体操に取り組む子。跳び箱八段に挑戦する子等々、生き生きと活動している姿はまさに「試す人」そのものである。

進んでやろうとする意欲、自分の夢に向けての挑戦性の芽が育つことを期待している。

## 漢検合格をめざして

光明小六年　山本湧也

ぼくたち光明小では、本田宗一郎さんからもらった言葉「試す人になろう。」というめあてに向かっていろんなことに挑戦しています。

ぼくは、漢字が得意なので、漢字検定四級にチャレンジします。四級の漢字は、中学一年生の漢字も入っているので、とても難しく、四字熟語など5級にはなかった問題が出ます。しかし、あきらめるわけにはいかないので本田さんの「試す人になろう。」を心に刻み合格めざしてがんばります。

## 試す人に近づくために

光明小六年　牧下沙也加

光明小学校には、夢タイムという時間があります。夢タイムは、本田さんのように試す人になろうに一歩でも近づけるように、いろいろなことにチャレンジする時間です。私は五年生のとき、「刺しゅう」をしました。難しかったけど、毎回、本を見ながらがんばりました。一学期かけて、やっと一つの作品が出来上がりました。わくに入った四この小さな花の刺しゅうで、出来は、まだ下手だったけど、私自身は、最後までやりとげた充実感でいっぱいでした。今年は、タイピングの早打ちに挑戦するのでパソコンをがんばります。

## あきらめずに挑戦する

光明小六年　金田瑞穂

わたしが夢タイムで取り組もうと思っていることは、音楽部活でやっているトランペットです。五年生のときに、初めてトランペットをふいたときは、なかなか音が出ずとても苦労しました。でも、もう少しがんばったら、もっとでるかもしれないと思って毎日練習していたら音がしっかり出るようになりました。今では、高いしの音まで出せるようになったのでこつこつと一つのことに取り組んでいくことは、とても大切なことだと感じています。

夢タイムでは、自分の力を発きできるようにまた取り組んでいきたいです。

これからも試す人になって挑戦したいです。

GL1500　アメリカ生産車

## 本田さんの生まれ育った天竜市

木下孝三

光明幼稚園の門の所に一本の老木がある。仕事で訪問する際、どうも自動車の置場で邪魔になる。園長先生に「切ってしまったら」と申し上げたら顔色を変え「木下さんとんでもない。本田さんが幼少の頃登ったりして遊んだ大切な木です」といわれた。

園長先生はその後、教育長さんや中谷市長さんに進言したかどうか定かでないが、数か月後木の回りはすっかり整備され、いわく付の看板まで建てられていた。

年に数回幼稚園を訪問しますが、本田さんのガキ大将当時、先生に叱られどなられくもの子を散らすように、先頭に立って逃げて行った姿を想像します。

木登りと言えば、私の幼少の頃、在所の六所神社は子供達の遊び場だった。悪童達とテニスボールに木の棒バットでよく遊んだ。遊び疲れてお腹も減り、ガキ大将が隣のお寺のミカンをとりに行こうと言うことになり、体の小さい私が木に登る事になった。お寺の住職は度重なる子供のいたずらに手を焼いていた。早速飛んで来て「コラ!!」と一喝。皆んなが逃げて私ひとりが木の上でワンワン泣いていた。下りて来た私を見て「あれ彦右衛門様の坊ちゃんじゃないか。よしよしそこで待っていなさい。」といって家にもどり、小さな籠を持ってきてミカンを一杯つめてくれた。「さあ気を付けて帰りなさい」と。母が何処でくれたと問われたのでただお寺とだけ言った。母は籠の中にマッチを入れてお礼に行ったが、私は別に叱られはしなかった。本田さんの生まれ育った所は天竜市これは他にない絶対的なものです。本田さんの著書を読んで読者がこの地にきて諸々の事を追想するのではないかと思います。

本田さんの幼少の頃から、世界の本田さんになった背景を主体とした記念館が出来、先生に引率された子供達が大勢来館し感動を得てくれたらとひたすら願っています。

マキの木
光明幼稚園前のマキの木
立木市の宗一郎さんが腕白時代遊んだ思い出のマキの木です。

## ジョーク名言（迷言）に感嘆

梶村正吉

昭和三十五年（一九六〇年）頃、東京八重洲の新本社ビル内にて、営業サービス課のK課長と同僚課長との会話を聞くと「オヤジさん（本田社長）には参ったよ！しかしうまいこと（表現）を云われたよ。」との事。

「オヤジのジョーク（迷言）の事だよ。うち（ホンダ）には三大バカッツラがいるぞ――。」とのこと、何んの事か聞くと、それは「東京（本社）のバカ。」「埼玉（工場、研究所）のバカ。」「浜松（工場）のバカ。」一瞬ムッーとした感情を覚える。

会社トップの本田社長が、従業員のことを一まとめにしての「バカ者」発言とは。しかし、待てよ！とその意味内訳を聞くと「東京のバカとは、オレ（社長）が一言云うと必ず文句を云い、行動をしないそのうちに本社に居なくなってしまう。オレが忘れた時分に返事をする。」

「埼玉のバカとは、オレが一言云うと、やりもしないで一言文句を云い、そのうちに行動をする。オレが見に行くと報告するからな――。」

「浜松のバカとは、オレが一言云うと黙って直ぐに行動をする。オレが聞くまで報告しないんだよなア――。」

さもありなん、云い得て妙と納得し、地区毎の全従業員をまとめて透視観察し、誰にでも理解出来る平易な言葉の一言に表現をしてしまう。集団心理を見抜くことの出来る洞察、眼力と云うことか――。本当に鳥肌の立つ思いをし、感服した迷言？――でした。

## 同窓生の思い出聞き取り事業

### 笹竹幸次さんインタビュー

（聞き手　浅野　建雄事務局長・理事）

**―本田宗一郎顕彰会というのを作りまして、いま会員が五〇三名おります。平成十八年に本田さんの生誕百年を迎えますので、いろいろ事業を計画しています。今日はその一環として、笹竹さんのお話を伺いにまいりました。**

―笹竹さんも本田さんと同じ年ですよね？

笹竹氏：そうです。いま九十八歳、明治三十九年九月五日生まれです。

―本田さんと知り合ったのは、小学校に上がる前ですか。

笹竹氏：生まれたところがすぐそばですから、小学校へ入る前からよく知っていました。

―当時の山東小の一学年は何人くらいでしたか？

笹竹氏：四十人くらいのもんでしたね。入った頃の写真があるだ。私がしゃべるよりそれを見てもらったほうがいい。

―小さなときは、誰とどんな遊びをしましたか？

笹竹氏：誰と遊んだかっていうとだね、いろんな場があるもんでね。本田さんがむちゃくちゃ偉くなって、今じゃ寄り付けんくなった。生まれた当時、小学生時代は同じようなレベルだった。まさか世界一のホンダになるとは誰も思ってもいない。皆さんが子どもの頃に友だちとやったと同じような状態で、小学校に行けば「あのやろうは生

意気だ」とか「べちゃべちゃしゃべりやがる」といってみたり、おかしなことをやっては笑かしてみたり、こりゃもう昔子供時分はふんと悪さはするが、悪気でやったわけじゃない。当たり前のつもりが悪気になったり、いろいろあるわけですよ。そりゃ雲泥の差ですよ、世界のホンダになったところを見ると。本田の幼少時代を話すと、われわれと同じような生活をしていた。もの言いは悪いし、人の柿はとるし、これは子供の常識だ。偉くなるとね、へたに悪いことは言われんだ。ネ、これまでたくさんの記者の人たちが訪ねてきちゃ話をするが、あれは鼻たらしで、こぎたない格好をして、なんぞ言った。それが、今の本田宗一郎は偉くなったから語弊がある。昔は語弊もなにもなくて、親父だって「こら小僧」とか、やかましけりゃ「あっちへ行け」っていってたものだ。本田の子供のころの話をするとだね、もったいなくて言われんことばかりあるわけだ。

　この写真は今の鍛冶屋のあるところです。

―この写真は珍しいものですね。

笹竹氏：ここはきれいになってしまった。跡はあるけどね。

―遊んだ場所は神社やお寺ですね。

笹竹氏：そうですね。山とか、神社、お寺でしょうね。

　光明山、登りぎわに随道があった。大谷に通じる道のあの中にコウモリが巣を作って、晩になると出ちゃする。みんなでコウモリを取ると言うので、それを「一度に行け」とか「二度に行け」ってやってた。昔農業が盛んな時期に、あすこの向こうの部落じゃ田圃の水がなくなって、昔なんとかいう市会議員なんかがため池を作った。その池から水をとっていくのだが、雨が降ると溢れる。それで大谷に水をやった。それが役に立たんようになって、僕ら子供の時分には、トンネルの中でコウモリがたくさん巣を作っていた。それを取りにいったり、見に行ったりしてたりね。そんなこともしてました。子供の頃はいたずらです。真っ暗ななかにロウソクつけちゃ入った。こうもりが天井にぶら下がっている。そんなのを見たりしてた。

かじや

　この随道の上が〝すべり山〟っていう。子供の時にやったもんだで〝すべり山〟という名がついた。子供がつけた名だね。そのすべり山を光明山にずっと登っていく途中に、樫の木が植えてあった。樫の木というは新しい芽がいくつも出ちゃって繁っていく。その木の間を滑り落ちる。滑り落ちちゃ尻をむいた。昔はズボンなんか穿かん。みな着物だった。それを汚すもんだから、家に帰っちゃ怒られる。樫の木の葉を何枚もとってきちゃ、ケツに敷いてすべる。悪いことはなかなか研究する。それでザーッとすべって降りる。ケツが破れたり、泥だらけになる。枝でそりを作ったりもした。今の若い者は機械でやっちゃうけど、あの時分はみんな手作りだ。時分らで作るのが面白いだ。なにしろ斜面が急で、これくらいの樫の木がドーッとはえ揃っている。それを縫って滑り降りる。遊ぶ時が一番面白い時だったね。そればっかりじゃというので、みんなで悪いことばっかり考え出してやった。孟宗竹という竹がある。その竹を登っていくと、重さで先がずっと下がる。曲がるからね。それで他の竹に移るんだ。昔のターザンみたいにサ。なかなか遊ぶことは多かった。悪童が五～六人も集まってやるわけですから、そうした遊びを幾つも考え出すんですね。

　それから水泳。天竜川を泳いで渡ったのは私らくらいなものでした。弁天島。今はグラウンドの一部になっちゃったけど、あれが島だった。そこから阿多古の方へ泳いで渡った。天竜川を越すのはなかなか難しい。弁天島から飛び込んで対岸めざして泳いで渡るんです。ずいぶん流されるんです。渡り方があった。それを知っててやってたもんです。流れがきつかったからね。二俣川も今よりずっと水量が多くて、四十八瀬川といっていた。今の二俣川です。これが山東から二俣に入るまで四十八の瀬があった。そこに誰が植えたか知らんが、松とか檜とか杉が植林されていたから水量が多かったんだ。そのおかげで、水はしょっちゅう流れていて、私らの子ども時分は、ここで泳ぎを習った。その時分は水浴びっていってた。生意気にこの川は結構急流なんだけど、すぐ浅くなっちゃう。飛び込むとズーッと流れていって、瀬になっていて深いところもある。これだけうねうねとまがっている川も珍しい。曲がるところはみな深い。一番遊んだのは八幡のところだな。いまの農協のところだ。だぶだぶした深いところがあった。淵だな。

　はじめは泳げんもんだから、どうかしてうまく泳げるようになりたい。誰かが「メダカを呑むと泳ぎがうまくなる」って言い出したものだから、われもわれもとメダカをすくって生きたまま飲み込んだ。誰から聞いたンかわからんけども、そんなこともやった。

―なんとも研究熱心ですね。好奇心も旺盛だ。

笹竹氏：飛び込んだのは八幡のところで、学校の帰りにあそこを必ず通るだね。どん淵の深いところにちょうど木が上に出ていた。それを伝っていっちゃ飛び込んで泳いでいた。飛び込みは名人になった。今みたいにぐるぐる廻って飛び込むっていうような芸はなかった。どぼんと落ちるだけだ。くるくる廻って落ちるような芸があるとは思わなんだから。それでも木を伝っていって飛び込むってことは発明しただね。子どもの勇気でできたんだね。

―学校の勉強はどうでした？

笹竹氏：勉強はしなくてもできたから、いいべ

や。勉強なんてあんまりせんかった。できたという方じゃないわなぁ。先生は悪戯するやつは悪いもんだと思っていた。

―算数はどうでした。

笹竹氏：勉強すればできるということは知っていた。それを勉強せずに悪戯ばっかりしていた。

―勉強より学校から帰ってやったことは？

笹竹氏：学校から帰れば、子守りがある。子どもが幾らもいた。本田なんか鼻たらして袖のところはピカピカ。そんな格好して、子どもをおぶっちゃ木に登ったり、いろんなことをしてた。

―おぶっていたのは弁次郎さんですか？

笹竹氏：おお、そうだ。弁次郎。あっちの家じゃ子どもがたくさんあったから、本田はいつも子どもをおぶっていた。

本田はよく子どもを忘れて帰ってきて、ひどく叱られたそうです。木に登る時は、子どもを根元に縛っておく。本田の家は鍛冶屋だったもんで、それから自転車屋に変わっただんね。自転車屋になったら、本田は自転車に乗ることを覚えた。私のところには自転車がなくて、本田のところにはある。うちは米穀店兼肥料商だった。自転車が欲しくてしょうがなかった。自転車を買ったのはこの辺じゃ早い方だったんです。

―当時の高級品メーカー「ラージ」でした。

笹竹氏：本田さんのところで買われたんですね。

笹竹氏：そうです。本田は三角乗りで浜松まで行ったり、鹿島にも行った。鹿島にも飛行機乗りが来て、飛行をやったんです。私もこの時は行きました。一銭だったか二銭だったか、見るに料金がかかった。当時はまだ、天竜川を渡るのは渡船で、つり橋もあって渡れました。そして飛行機を見ました。本田はなにしろ機械好きだったから。

―本田さんは、算数や理科は得意だったんでしょう？

笹竹氏：できただいね。学校へ行けばいいという当時のことですから、できた方でしたね。理科なんかは親父が鍛冶屋やっているくらいですからね。本田が出刃包丁を作ったこともありました。曲げ細工やったり、マメで四角を作ったり、そんなことを良くやっていた。手先は器用でしたよ。大豆を水の中入れると膨らんで大きくなる。大きくなったやつを細いヒゴで通していろんな形に仕上げたこともあった。そんなことを良くやってた。また本田は蒸気を利用して動かす船の模型を作ったりもしていたね。みんなを池に連れていって動かして見せたりもした。蒸気で船を動かすってのを言い出したのは大隈久っていう、今先生をしている人の親だな。あれも同級生だ。

―印鑑偽造事件の真相はどんなことでした？

笹竹氏：本田は手先の器用なこともあって、当時習字だとか図画だとかを描くと、四十名分を「あんたの子どもが書きました」って父兄に回覧して廻すことになっていた。親は見やへんだよ。子供たちも親には見せん。先生はなんでも廻せっていう。親が見た証拠に判をつけっていう。「あっ、先生悪いことを始めやがった」というので、本田が考え出したことなんだが、親父の判子を作っちゃえってね。判の作り方なんぞわしらは知らなかった。そこで本田が発明しただよね。

また、本田は親父に怒られるだよね。自転車のペダルのゴムをな、本田が彫っただよ。本田はそれで良かった。俺はそんなこと知らんもんだで、習字やなんかが家に廻ってきた。そこで本田は俺の判を作った。ついてやるから持ってこいっていうんで、本田が作った判を押して出した。親父には廻ってきたのは見せんかった。本田は良かった。苗字が左右対称だから。俺の苗字は裏返しになる。それを知らんもんだで、本田が作ってくれた判を押しさえすればいいと思っていた。知らん顔していたら、どこの誰か知らんが学校に言ったらしい。判子が反対になっているって。

―父兄の誰かですね。

笹竹氏：浅野さん、あんたのところの恭平さん。お父さんの弟だいね。いっさのお父さんだ。そこで綿屋の袴田さんから言われちゃっただ。ばれちゃった。本田がそう言ってくれれば良かったんだ。笹竹が反対になっていた。本田もそこまでは気がつかなかった。自分の時は良かったんで、俺のも大丈夫だろうと思って彫ってくれた。俺のが恭平さんのところに行ってバレるとは思わなかった。袴田のとその前の浅野だ。どっかで見つかっちゃった。びっくりしたね。「あぁそうなるんか」って思った。いいと思って彫ったんだ。それが失敗だった。

―智恵は廻りますね。

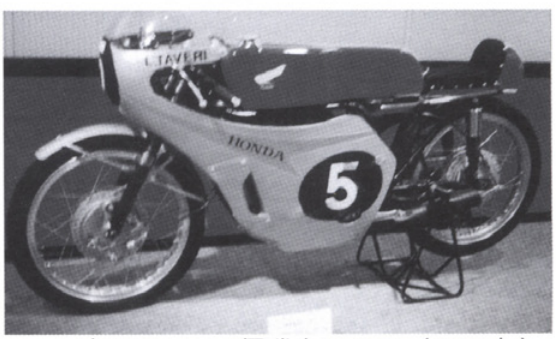
笹竹氏：まぁ、悪いことをしただね。本田は、頭が違っていた。まねも好きだったよ。飛行機見に行った後は、自分の半纏を広げて走りながら「ブーン、ブーン」ってやり出した。本田がやるとみんな真似をするんだね。そんなこともやってた。なにしろ器用なところはあった。

―遠足など、学校の行事でどっかへ行くというようなことはありましたか？

笹竹氏：遠足っていうかね、修学旅行で光明山ばっかりだね（笑い）。元光明だね。ここからあそこまで二里だいね。光明山に歩いて登るって決まっていただね。立派なお寺で、今のとは違っていた。今の奥の院に獅子があるんだが、何丁目、何丁目という橋があって三十六丁あった。

―軍隊行進みたいに歩くんですか？それともてんでばらばらに歩くんですか？

笹竹氏：並んで歩くんだが、道草したりもする。一応は並んでいった。奥の院の社に登るに五十メートルくらいの階段を登る。上は平になっていた。その登りかけで飯を喰うんだが、うちで作っ



マン島 T.T レース優勝車 RC145（1962 年）

た握り飯を持っていった。誰かが落としてそれが転がり落ちて、一番後ろまで落ちて来る。

当時、奥の院には坊さんが三十～四十人もいた。お経を上げるだいね。この坂道に屋根がついていて、家のようになっていただいね。そこに腰掛けて飯を喰うだ。

―石段じゃなくて、板段になっていたんですね。

―板廊下になっていたわけですね。

笹竹氏：誰かを転ばそうって狙っていた。その橋を登ってしまうと御殿があった。その大社が焼けてしまって、その屋根に火がぼこぼこ落ちる。社が燃え落ちてしまっても、火の中で稲荷さんの屋根は燃えなかった。その稲荷さんをもってきて、今の光明山になっている。光明山は火の神さんですからね。今光明山のお稲荷さんには赤い鳥居があるが、これはその時の鳥居を持ってきたんだ。火の神様でね。燃えたところから約一里山の中に行くと奥の院。四帖半から六帖くらいの大きな岩があって、これから火が出て焼けたという。それで新居の海岸で魚がとれんくなったっていうんで、新居の漁師が怒っちゃった。光明山で火が出たから、新居じゃ魚がとれんくなったっていって漁師がたくさん来て、ここを祀った。そんな話が残っている。

―本田さんは学校を卒業して東京に行きましたよね。笹竹さんはどうされましたか？

笹竹氏：奉公に出ています。浜松の浜松米穀さんで修行しました。家が肥料や米を扱っていたものですから。

―卒業して何年後に本田さんと再会したんですか？

笹竹氏：本田はその時小僧をやっていてね。僕は兵隊にいっていたから終戦になってから会った。それから本田は自動車の修理工場をやっていて日本楽器の川上嘉市さんに拾い上げられたから、兵隊にはいかないで済んだ。機械のことで川上さんに可愛がられて日本楽器の嘱託みたいになってたからね。その後除隊して帰郷、船明にあった日本楽器の分工場の警備の仕事に就いた。

―時間の都合でその後の様子をまとめました。

戦後福田で製塩を試みていた本田さんを訪ねて塩を分けてもらったエピソードについても話してくれました。この間本田さんは日本楽器の嘱託みたいになっていて、この船明の分工場からも東海精機からも旋盤やボール盤など生産機械を退職金代わりにもらって、本田技研の基礎にしたという話もしていただきました。本田さんが、川上嘉市さんの選挙応援もいっしょうけんめいやっていたことなども、証言してくださいました。

笹竹さんは、ご子息の御助力を得て、過去の出来事を「故幼少の本田宗一郎氏の思い出」（平成十四年四月）という冊子を残しておられます。今回の取材でその一冊を贈呈いただきました。

## おわりに

本田顕彰会会報第二号の発行に際しまして、多数の方々より寄稿していただき、誠にありがとうございました。

この第二号には、世界のホンダ創業者「故本田宗一郎」氏と、生まれた所がすぐそばと言う、よき遊び相手の笹竹幸次氏（九十八歳）の思い出インタビューが書かれており、自然にその当時のふんい気に入ってしまう楽しいお話が満載。また「本田」氏が小学校に通われた現光明小学校の教育目標の一つ「試す人になろう」に挑戦している六年生三名の児童の報告も綴られております。

たくさんの市内からの寄稿があり嬉しい限りです。更に「本田」氏と関係の深かった市外の方々にご協力いただき、第二号に幅が出て感謝いたしております。

この度「天竜のあゆみ」大地に根を張り、天にのびる木のごとくの本の中に「本田宗一郎」氏の創造力を掻き立てた川辺について、次のように書かれております。

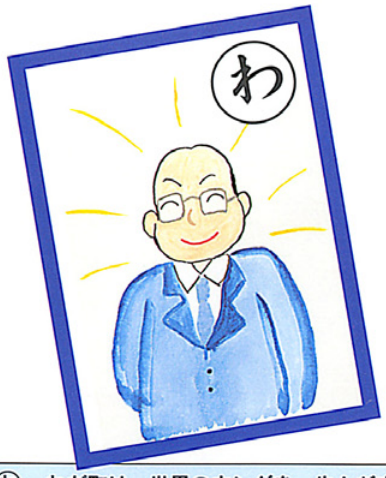
本田さんの生家は現天竜市山東にあり、「暴れ天竜」と呼ばれてきた川が、うねるように大きく蛇行して集落の下を流れていました。その天竜川と支流の二俣川が、本田少年の遊び場の舞台であり、学びと体験の場であり、生涯に渡って心の支えとなった原風景だったのです。

さらに、上流から流れてくる夜光虫やくるみなどを見て、どこで集中豪雨があったか知ったと書かれておりました。そして川に飛び込み川底の変化を点検。水が出ると小さい石は川下へ移動しますが、大きい石の中には水が出るごとに、少し川上へ動くものがあることに気付きます。「水勢が石の底を少しずつ掘るようにえぐって、重い石は川上に向かって静かに傾いていく運動を繰り返したのであろう。」…何と言う観察力でしょう。

次号も多くの方々の投稿により、更に内容を楽しいものにしたいと思いますので、ご協力をお願いいたします。

清瀧寺鐘つき堂
宗一郎さんが尋常高等小学校時代、いたずらをして鐘を鳴らして昼時間を早めた鐘

# 光明かるたより




�わ　わが町は　世界のホンダを　生んだまち

天竜市の名誉市民本田宗一郎さんは、光明村の出身である。少年時代から「夢」を追い続け「本田技研」を世界のブランド「HONDA」にまで推しあげた。

本田さんは、故郷を大切に思い、光明小学校に「試す人になろう」という言葉を贈り、子どもたちは、それを目標にして学んでいる。

（絵　杢出ファミリー）

�え　エフワンに　夢をかなえた　本田さん

二輪車しか作っていなかった本田技研が、昭和37年（1962年）に初めて四輪車を作り、いつかＦ１に出たいとの思いでわずか二十名で四輪開発部がスタートした。

昭和三十九年（1964年）七月ドイツニュールクリングのＦ１に出場するが、車高調整ミスでリタイヤ、その後も数々の失敗を繰り返し、昭和40年（1965年）メキシコの大会へ、車体はナショナルカラーのアイボリーホワイトに日の丸が塗られ堂々出場。見事優勝。この大会で勝利も夢も手にすることができた。

（絵　鏡山小５年　小澤陽日）

㋥　夢追って　名付けたバイク　ドリーム号

昭和24年（1949年）、ホンダはオートバイ「ドリームＥ型」を発表したが、音がやかましいという欠点があった。

その欠点を克服した４サイクルエンジンの開発に成功し、Ｅ型と名付け、Ｅ型エンジンを載せたバイクは、ハーレーなど世界のバイクと競走して箱根超えに成功した。

（絵　光明小５年　南谷美咲子）

本田宗一郎展　絵画集より「天竜川」

# 本田宗一郎顕彰会

編集　理事　鈴木かづ子　事務局長　理事　浅野建雄

〒431-3314　静岡県天竜市二俣町二俣20番地2

TEL・FAX：0539-25-6122

20-2, Futamata, Futamata.-cho, Tenryu-shi, Shizuoka 431-3314, Japan